
神童

浜田色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神童

【Nコード】

N3570P

【作者名】

浜田色

【あらすじ】

私は、あの日から眠ることができない。

それは、病院で少年に出会ったことから始まった……。

あの日から、私は眠ることができない。

いつ、彼に見つけられてしまうかと思うと物音ひとつでも怯えてしまう。

彼はもう、どこまで来ているだろう。

私の裏切りにきつと腹を立てているに違いない。

ひょっとすると、もう直ぐそこまで歩いて来ているかもしれない。
真っ暗な部屋の中で、私はじっと聞き耳を立てる。

階段を上っている音がする

ひとつ、

またひとつ。

少しずつ大きくなっていく。

足音は、私の家の前で止まった。

いよいよ恐ろしくなる。

寒気がする。

頭が割れそうだ。

少年の声が・・・

「おじさん。」

ドアが、ゆっくりと開いた。



彼が入院して、もう二ヶ月たった。

今日もいつものように、彼の元へ行こうと思う。彼は、二階の個室にいて、きつとあの日のように窓から外を眺めている。風が吹いて、黒い髪がさらさらと揺れるのだ。

エレベーターから降りて、廊下に出ると病院の独特な臭いがした。どこかの病室で、泣き声や笑い声が聞こえる。背中を丸めた老人が、より一層小さくなってオブジェのように固まっている。白い服を着た女性が、細い足で廊下に黒い影を引いてゆく。

時間はゆっくりと動いていて、その芸術的な世界の中にある細くて長い階段を、恍惚とした表情で降りて来る男の集団。そのどれもが白いマントを羽織っており、私はこの世界を退屈な絵でも見ているかのようにあしらった。

私はその集団を追い越し、個室のドアを開けた。無感動な部屋の中に一人の少年が眠っている。そばにある椅子に座って、にっこりと笑いかける。

「今日も来てくれたんだね。ありがとう。」

そう、彼が言っている気がするのだ。

彼と初めて会ったのは、夏の暑い日だった。

盆が終わり、八月も終わりに近づいた頃に、私は倒れた。ただの過労だったのだが、友人の助言もあって、大事をとって入院することにした、休暇のようなものだった。

私は、仕事以外の時間の使い方が、とても下手で、これといった趣味もなく、テレビを見る習慣もなかった。しいて言えば新聞を読むくらいしかする事が無かったので、これほど退屈な事は無かった。

仕方が無いので、スリッパを履いて外に出ることにした。と言っても、廊下を行ったり来たりし、半分が揮発した薬品で満たされた空気の中を虚ろな目で彷徨っているだけだったのだが。

何もかもが退屈だった。仕事場の塞ぎきった環境に慣れてしまっただけか、この世界から逃れようという気持ちも起こらなかった。

一番奥の部屋（おそらく個室だろう）、ドアが少し開いていて、名前を見ると「小林 歩」と書かれてあった。さりげなく中を覗いてみると、間から子供が眠っているのが見えた。

どこも同じ造りのはずなのに、冬の雪に当たった太陽のような銀色の光が眩しかった。

驚かされたのは、その細い体につながれている何本もの管だ。

「だれ？」

少年は起きていたらしく、私がよっぽど怖かったのだろう、顔をいっそう青白くさせた。

「わ、悪気は無かったんだ。ドアが開いていて気になったから・・・ごめんよ。」

恥ずかしかった。少年の目に私は変質者のように見えたに違いない。

「まって。」

ゆっくりと体を起こしながら、そそくさと立ち去ろうとしている私に、部屋にある椅子に座るよう勧めてきた。私は、羞恥心で顔を紅潮させながらも、勧められるままに腰を下ろした。

「おじさんも、ここにいるの。」

「ああ。」

「悪い病気なの。」

「いや、ただ疲れて倒れただけだから。」

「そっか、いつ退院するの。」

少年は、十歳前後に見えた。

「明後日には退院できると思うんだけど。君はいつからここに入院してるんだい。」

「クリスマスの前だったかな。おばあちゃんの家で倒れちゃって。でも、サンタさんはちゃんと 病院までプレゼント持って来てくれたよ。ぼくは体が弱くて、入院する前も病院に何回か検査してたんだ。でも、みんな何の病気かは教えてくれないんだ・・・。」

少年は、半年間も日に当たっていない事実そのままに生白かった。けれども、黒髪を揺らして笑う顔は、痩せている事を除けば、無邪気な子供のものだった。

きつと、治療の難しい病気なのだろう。

私は、それ以上の事はあまり聞かないことにした。

三十分ほど話した後、少年と別れて自分の部屋に戻った。個室ではなかったので他の患者がいたわけだが、その声はどれも耳には入らず、どくどくと波打っている自分の胸の音だけが伝わってくる。

仰向けに寝転がって、天井を見つめる。丁度、一匹の子バエがくるくと回転しながら蛍光灯の中へ入っていく所だった。

蛍光灯は白い光を発しながら、ハエを食ってしまった。

ハエは死んだのだ。

顔を殴られたような衝撃をくらった。

「おじさん。大丈夫？」

向かいの患者の子供らしい。ランドセルを背負った少年が、私の枕元に落ちたサッカーボールを拾っている。

私は額をさすりながら、

「大丈夫、大丈夫。」

現実に戻った痛さを感じていた。



退院した後も、検査のついでに何度かあの少年に会いに行った。少年??アユムは不思議と惹かれる少年だった。口数も少なく、おとなしい。何気ない素振りや表情が、絵画を見ているようで、年齢や性別を超越した者を見ているような、そんな宗教的な予感さえ始める。窓から外を眺めている姿は、まさに画家たちが追い求め続けた理想の少年像そのままだった。

今日もいつものように弱弱しい笑いを浮かべて、アユムは外を見ている。

外は目を細めるくらい明るかった。公園で幼い子供が何人も、かけっこをしているのが見える。病弱な少年は、それを羨ましげに見つめた。

「おじさんも、あんな風に遊んだりした？」

「ずいぶん前になるけど。」

「そっか。」

アユムは目を閉じた。

「ぼくも、走ったり、キャッチボールとかしてみたいな。うん、キャッチボールがやりたい。やったこと無いんだ。」

「お父さんとやればいいじゃないか。」

「お父さんは、キャッチボールやれない。」

一瞬、その口から出た音とは思えない、重たい金属のような声が出た。私は首筋がひんやりとする感触に襲われた。

「やらない」、ではなく「やれない」の意味を知ることになるのはずっと後だったが。

「じゃあ退院したら、おじさんと二人でやろうか。」

「うん……。」

アユムは時々、眉間に皺を寄せて、苦しそうに話す。

「いつになったら、できるかなあ……。」

空気が漏れるように発せられた言葉は、網のように張り巡らされ

ている点滴のいくつかを揺すった。太陽の光が反射して、天井にちらちらと星のような絵を描いた。胸を押さえた　少年は、表情を見られたくないのか、私とは反対側にあるドアのほうに顔を向けてしまった。

「アユム君。」

彼の手を握って、まるで父親になった気持ちで笑いかける。

「いつかきつと、一緒に遊べる日が来るからな。」

病室を出ると、ドアの前に子供が立っていた。

この前、サッカーボールを顔にぶつけてきた少年だった。

「おじさん、アユムと知り合い？」

アユムの名前が出ると思わなかったので、少し驚いた。どうやら少年はアユムと同じ学校に通っているらしい。

「アユムのお母さんがノイローゼになったって聞いてさ、寂しいかなあと思ったから、こうして　俺の母さんの見舞いがてら様子見に来てやってるんだ。」

あいつ、あんまり友達いねえから、俺が行ってやらないと、って思ってたけど、おじさんがいるんだったら、もう行かなくてもいいか。」

「じゃあ、その手に持ってるプリントの束は誰が持っていてあげるんだ。」

少年は、にやりと笑った。自分が必要であることを始めからわかっていて言ったのだ。

子供だからとか、というのは関係ない。

こういう人間は苦手だ。

「おじさんは、仕事に戻るから。」

「うん、またね。」

夜、病院は静まり返っている。カーテンの隙間から、月の光がこぼれて、蒲団を青く染めている。月は三日月だった。

私は面会時間を過ぎたと言うのに、仕事が終わるのが遅かったからと言って無理やり入れてもらった。この時ばかりは流石に受付も怪訝な顔を隠さなかった。もしかしたら私のことを少年にしか興味をもてない人間だと思っているのかもしれない。

そういう訳ではないのだが、どうも彼が気になって仕方がない。明かりは足元を照らす電灯だけで、私を不安にさせた。時折、クーラーの音が聞こえたが、それも鈍い音を立ててそれきり動かなくなってしまうた。

いよいよ私は不安になって、早足になって歩いた。自分が眠っていた病室を通り過ぎようとした。

ドアが開いていた。

部屋は深い群青で染められていた。仕切りのカーテンが、水面のような模様を映し出している。

私は、ぞっとした。

水面に人の影が見える。

ベッドの位置から、昼間に会ったあの偉そうな少年の母親だとわかった。

小刻みに震える影は、泣いているように見えた。

私は一瞬、足を止めて母親の影に心を奪われたが、看護婦の苛立った顔を思い出し、病室の前から立ち去った。

家に帰って、横になると。あの幻影のような時間を思い出した。

母親は、つらい気持ちを隠して、せめて子供の前ではと元気に振舞っているのだろう。

夜は一人になるから、青く硬い鉱物の殻に閉じこもって泣いているのだ。空の上から三日月が母親の運命を笑うかのように笑みをこぼす。

私は、とても恐ろしくなって胎児のように丸くなって眠った。

◆

念の為にと、身体検査をした結果にも、少しばかり血圧が高いというぐらいで、たいした問題はなかった。

ただの過労だったはずなのに、再検査しなければいけなくなったりと、仲間が心配してくれたが、今日で本当に病院に来る理由が無くなった。

あの母親は、元気な顔をして息子と話をしていた。息子は今日あった事を説明するのに真剣になっている。

アユムの個室には人がいた。

おそらく母親だろう女性と医者が二人、そして父親と言うには年をとっている男性。四人でベッドを囲んでいる。

数時間前に容体か急変して昏睡状態に陥ったらしい。耳を澄ましている反射さへも無くなってしまったと医者が言っている。

アユムの母親は、項垂れたまま男の肩に体を寄せている。男は虚ろな目を動かないアユムに向けていた。

「我々も、全力を尽くしますので。」

そういつて医者は部屋から出ていった。

すれ違いざまに二人のため息が聞こえた。

人形のような顔は、本当に表情を浮かべなくなってしまっていたのだ。

来るべきではなかった、日を改めてまた様子を見に行こう。

廊下を歩いていると、ランドセルを背ではなくてお腹側に抱えている少年がいた。黒い髪に日に焼けた肌が健康的だ。

「おじさん。顔が青いよ。」

「ああ。」

「アユム、何かあった？」

さっきまでのふざけた顔つきは一変して、真面目な顔つきになった。

「なら、もう病院には来ないほうが良いと思うよ。」

少年は、はっきりと言い切った。

「おじさん、アユムの病気が治らないの気づいてたんだろ。」

「・・・。」

「アユムのお母さんだ。」

目を大きく開けた少年は、いつものふざけた顔に戻って、私の後ろを指差した。振り返ると、髪の毛の長い陰気な女性が立っていた。

「あら、ノボル君じゃない。お母さん、ここの病院だったのね。」

「うん。アユム、何かあったの。」

ノボルは、またわかつているのに聞いている。アユムの母親は一層暗い顔になって、寂しい笑いを浮かべた。

「ええ、ちよつとね。」

「お婆さん、これ。今日貰ってきたプリントなんだけど。」

「いつもありがとう。ノボル君にはお世話になってばかりね。でも・・・。」

手にとったプリントを握り締めた。

「あら、あなた、さっきアユムに会いに来た方ですよ。・・・小学校の方ですか。でも、アユムの先生は女の人だし。」

どう説明しようか考えている時に、ノボルが割って入ってきた。

「このおじさんは、アユムの友達なんだ。」

「そう、なの。」

こちらを見る母親の目が疑っている。このご時世、仕方のないことだ。

「前に入院したことがありまして。アユム君とは、何度か一緒に話をしました。」

「そうですね・・・。あの子、喜んだでしょう。寂しがりなのに、人と話すのは苦手な性格ですから。」

「いえ。優しくて、賢いお子さんだと思います。元気になったら、一緒に遊ぶ約束もしました。」

「あの・・・。」

「キャッチボールがやりたいと言っていましたので、今度グローブを買ってきますね。ノボル君だって、遊ぶよな。」

「まあな。」

ノボルは鼻をフンと鳴らした。

「有り難う、ございます。」

最後のほうは、もう聞こえなかった。

「アイツ、すごい悪い病氣らしくて、みんなで折り鶴を作ったんだ。」

母親と別れた後、成り行きでアイスクリームをおごる羽目になり、外のベンチで二人並んで食べた。

「きつと、かりあげ・・・じゃなくて、何だっけ。あ、そうそう。」

『カリスマ』なんじゃないかなあ。」

「カリスマ・・・美容師の？」

「おじさん、ちょっと古いよ。テレビとか見ないの。」

「悪かったな。」

コーンの先から溶けたアイスがこぼれているのを口で防ぐのを終えてから、ノボルは少し大人っぽく話し出した。

「なんだか一緒にいたい、って思う人間っているだろ。そいつの周りにはいつも誰かいるとかさ。アイツにはそういう見えない力があるのかも知れない。」

なるほど。と思った、自分がアユムに惹かれるのもそうかもしれない。カリスマとは、「神の賜物」という意味だと聞いたことがある。ノボルに言っていると、彼は笑った。

「子供はみんな、神様がくれたものなんだ、って母さんが言ったよ。」

「誰でも子供の頃はあったさ。」

「みんな大人になる。」

「当たり前だろ。仕事について、結婚して、たくさん忘れていくんだ。」

「昔を？」

「悪い、ことではないと思う。」

「アユムも、大人になれる？」

「なれるよ。」

少年の顔に笑顔は無かった。冷たい視線が私の嘘を見破っているような気がした。



ボクらは、かみさまの子供だった。

白い象が子守唄を歌ってくれたあの緑の大地。

あそこへ還りたい。

でも、手を伸ばしても見つからない。

なぜなら神様に見捨てられたからだ。

この世で生きてゆく術も教えられずに。

哀しい。

恨めしい。

今になってやっと気づいた。

一番憎いのは、かみさまじゃなかった。

神に愛されている子供。

ボくらの方がずっとずっと賢いのに。

お前の肉を引き裂いて、本当の姿を見世物にしてやろうか。

そうして汚い顔を天に返してあげよう。

ああ、

なんて愉快な妄想だろう。



彼が眠り続けて、もう二週間たった。

今日もいつものように、彼の元へ行こうと思う。階段で上る途中、

看護婦やら医者やらの横を通り過ぎたが、興味は無かった。

用があるのは二階の個室だ。

ドアを開けると、何も無い部屋に一人の少年が眠っている。私は、そばにある椅子に腰掛けて、いつものように挨拶する。

「やあ。」

返事は無い。それでも私の心は満たされてゆく。今日は少し長く話してみようか。

「この前、君が出てきた夢を見たんだ。二人で、遊んでるんだ。でも、運動神経がなくて、ボールを取れなくて君に笑われてた。アユム君はとても上手かったよ。コントロールもすごく良い。」

窓が開いていたのか、カーテンが髪にあたった。

「転勤、するかもしれないんだ。」

一瞬、アユムの腕がかすかに動いたように見えたが、気のせいだったようだ。

「転勤といっても、私は普通のサラリーマンじゃないんだ。デザイン関係の仕事をしてるんだ。注文を貰って、納得のいくものが出来れば、その分のお金を払ってもらえる。友人が自分の所に来ないかって誘ってくれてね。今よりも収入があるみたいだし、迷っているんだ。

大丈夫。心配しなくてもまた何度か病院には来るつもりだから。でも、今までのようにはいかないと思う。少し距離があるから。」

「おじさんも、引越すの。」

びっくりしたが、すぐにノボルの声だと分かった。

「ああ……。久しぶりだな。最近顔を見なかったけど。」

「うん、引越した。母さん、入院が長引くらしくて。今はお父さんの実家に住んでるんだ。」

「じゃあノボル君も病院に来るのは。」

「その、君ヅケするの、止めてくれない。いっそ『ノボル様』とかなら全然いいんだけどね。」

あいかわらず偉そうな態度をとる。

「ねえ、おじさん。今日はジュースおごってくれるんでしょ。」

子供の力は以外に強い。腕を引っ張られると抵抗できない。ずるずると引きずられて、あつという間に廊下に追い出された。

「熱いの苦手だから、ここで待ってるね。お金無いんだったら、貸してあげるけど？」

強引にドアを閉められ、私はとぼとぼ歩き出した。中の二人のことは知りもせずに。

ノボルの顔にさっきまでのふざけた顔はなかった。ドアにもたれかかったまま、アユムには近寄ろうとはしない。まるで、恐ろしい生き物でも目の前にいるかのように。

「あがいても無駄だぜ。アユム。」

花瓶にさしてあった白い百合の花が、ぽとりと落ちた。

「邪魔、するなよ。あの人はお前のものじゃない。」

何とも機械的な声に、風さへも止んでしまったほどだ。

「おじさん、遅いよ。待ってるのも、しんどいんだからな。」

ノボルは、オレンジジュースの缶を開けながら文句を言った。そして、まだ開けていないソーダーの缶を空いている手で思いっきり振り出した。

「炭酸なんだぞ。」

あれだけ振られてしまえば、当面飲み物を飲む気など起こらなくなってしまった。今あの缶を開ければ、どんなことになるやら。

ぱたぱたと、誰かが走ってくる音が聞こえた。病院の中なのにマナーのなっていない人間もいるもんだ、と思っていたら、この個室のドアが勢いよく開いた。

「ノボル君。お母さんが。」

看護師の顔は真っ青だった。誰も何も言わなかった。鼓動が早くなった。ノボルはどんな顔をしているだろう。

「ああ、そうなんだ。」

落ち着いた声がした。私の横に座っていた少年は、ランドセルを背負うところを向いて、にこりと笑った。

「またね。」

そのまま二時間ほど病室に座っていたが、彼が再びここに来ることは無かった。

冷たい風が頬に当たった。暗くなった窓を閉めて、とって置いたソーダーを飲もうと、指をかけた。

ぷしゅっ

炭酸は、勢いよく私の顔にかかった。

アユムの額にも、水滴がついている。

「しまった。」

誤りながら、持っていたハンカチで拭こうとする。ハンカチが額に当たるかあたらないかのところで、私は耳を疑った。

「冷たい。」

暖かく、柔らかい声がした。

「アユム、君？」

長いまつげが震えた。

「い、今、先生を呼んでくるからな。」

「だめ、言わないで。」

目覚めたばかりだと言うのに、ものすごく強い力で大人の腕を掴んだ。

「え。」

アユムの瞳が涙で揺れている。

「まだ、言わないで。今だから『起きた』んだ。今なら、アイツが見てないから。」

「アイツ？」

「お願い、ぼくと・・・。」

頬に、涙がつたつた。

「ぼくと一緒に逃げて。」

私は、体が熱くなっているのに気がつかなかった。

「ば、馬鹿なことを言うんじゃない。先生を呼んでくるから、お母さんにも連絡しないといけないし。」

「嫌だ。おじさんの家に連れてって。」

アユムは腕に通っている点滴の針を抜き出した。

「アユム君、止めるんだ。そんなことしたら体が・・・。」

突然の出来事に、頭がくらくらした。アユムの吸い込まれる瞳を見てしまった所為だろうか。

どこからか花の香りがする。気分が悪くなって思わず口を押さえた。

「大丈夫？」

頷いたが、やっぱり気持ち悪かった。

すべての針を抜き終わったアユムは、ベッドから降り、窓を開けて身を乗り出した。吹き上げる風が、髪を掻き揚げる。

「まだ、気づいてない。」

細い腕が、やっとのことで体を支えているようだ。

「ぼく、おじさんと居たいんだ。」

出会って初めて、はっきりと話すのを聞いた。

小さくて細い手が私の頬に触れる。

とたんに全ての思考が停止してしまった。

「お願い。此処じゃだめなんだ。」

ぼろぼろとこぼれる言葉を受け止める耳が、都合の良い解釈を始めている。

とにかく、此処から逃げなければ。

逃げるって何から？

まともに物を考えられるようになって来た頃にはもう遅い。

私は、少年の手を引いて病室を抜け出していた。

◆
ドアが開いた。

少年が立っていた。

「おじさん、いるんでしょう。」

私は、うずくまっている。

「ぼく、すぐにわかるよ。おじさんがどこにいるかなんて。」
ぎし、と床が鳴った。

「裏切ったなんて思っていないよ。」
ぎし。

「だって、おじさんが人に悪いことなんて、できないもの。」
ぎし。

「おじさんは優しいからね。」
ぎ。

「みいつけた。」

血の臭いがした。

◆

病院では、当たり前だが大騒ぎになっていた。アユムの母親は半
狂乱し、男性に抑えられていた。前にも母親と一緒に居た男だ。

二人とも、まさか私が自分の子供を連れ去ったとは思わないだろ
う。男性のほうが、事情を聞きに来た警察に質問を受けている。

「あの子は、大事な跡取りでした。彼女は、正式な妻ではありません
ん。ですが、本妻との間には 子供が出来なかったので、アユムが
会社を継ぐことになっていました。あの子は、私にとって、跡取り
という以前に大事な息子です。妻も、承知していたのです。なのに、
こんなことになるなんて。」

誰もが、身代金目当ての誘拐だと思っているようだ。

アユムを連れ去ったことを後悔した。二人に申し訳ないと思った。私の家にアユムはいるが、説得しても家から出ようとしないうし、理由を聞いても答えてくれない。

分かっているのは、どんどん体が衰弱していることだけだ。

医学的な知識の無い私に、治療など出来るはずも無い。

「やっぱり、病院に連絡しよう。」

「絶対に、嫌だ。」

ぜいぜいと喘ぐ息は、そのうちに激しい咳に変わっていった。

「じゃあ、何で行きたくないのか理由を言ってくれないか。」

「・・・。」

「このままじゃ、また病気がひどくなってしまうよ。」

「話したら、病院に行かなくてもいいの。」

私は笑った。

アユムは安心したように、理由を語り始めた。

「ぼくを眠らせたのは、ノボルなんだ。」

「なんだった。」

「ノボルは、ぼくがおじさんと話すのが気に入らなかったんだ。ぼくが誰かと仲良くするのが嫌なんだ。それで『力』を使って。」

「『力』って。」

「わからない、ぼくも眠らされるまでは気づかなかった。夢の中でノボルはずっとこちらを見張ってた。」

アユムは震えていた。本当に怖いものに出会った人の目をしていった。

「ノボルは、ぼくが嫌いなんだ。学校でもいつもいじめられてた。でも、ここにすることがわかったら、今度は眠らされるだけじゃ済まない、きつと殺されちゃうよ。」

いつの日か、ノボルと一緒にアイスクリームを食べた日のことを思い出していた。ノボルは、アユムのことを心配していた。あれが嘘だったというのだろうか。

本当に、アユムを酷い目にあわせるだろうか。

第一、非科学的だ。

被害妄想ではないのか。

そんな思いがよぎった。

すべてを話し終えた少年は、ほっとしたのか寝息を立てている。額にはうっすらと汗をかいていた。

「ごめんな。アユム。」

受話器に手をかけて、それから毛布をかけてやった。救急車は十分も立たずに来た。中には母親が乗っていて、いろいろ罵声を浴びせられたが、理解できるのは少しだった。警察に事情を聞かれ、ある程度説明すると、後日警察署で事情徴収をされると言われた。

幸い、アユムの父親のほうが大きな事件にしたくないというのがあって、罪にとわれる事はないようだ。しかし、アユムの意識が戻ってよかったよかった、と何処か胡散臭い感じの彼の台詞が私の耳を汚してばかりだったが。

あの時、まともな判断が出来なかったのが恥ずかしい。もう、簡単にはアユムにも会えないだろうし、しばらく会わないほうが良いと思った。

いや、おそらく二度と会わないほうがいいのだろう。

さっきまでの自分とは明らかに違う、どんどん冷静になっていくのが分かる。頭の中が正常な判断を始めている。

再び電話を取って、友人に電話した。



あれから、ノボルにもアユムにも会っていない。

引越してもう、数日たっているから一度会いに行ってもいいと思ったが、思いとどまった。

アユムがあんな目にあったのは、自分の所為なのだ。あの話が嘘

にしても、結局は病院から連れ出して容態を悪くさせたのは私なのだし、両親が二度と私を許すはずがない。

電話が鳴った。

驚くことに、アユムだった。

「おじさん。」

「どうして、ここがわかったんだ。」

「わかるよ。」

「あれから、調子はどうだい？」

「それより、おじさん。」

受話器がひんやりとする。

「どうして病院に電話したの。ぼく、帰りたくないって言ったじゃない。」

「それは、」

「嘘、ついたんだ。」

「熱もあったし。」

「お母さんが心配するから、電話したの。」

「それもあるけれど。」

「じゃあ、もう大丈夫だよ。」

「え。」

「お母さんもお父さんも、もういないよ。」

「・・・どういことだ。」

「ぼくが戻ってから、お母さんはずっと五月蠅かった。泣いたり喚いたり、物を投げたりしてた。あの男なんか、ぼくの事は会社のために必要な存在って思ってるだけで、僕の中身とか興味なかったし。お母さんも邪魔みたいだったし。でも、死んじゃったから、今はどうでも良いけどね。」

アユムは、けたけたと笑っている。

「正直に言っと、あの二人がいなくなっってほっとしてる。」

「ご両親が亡くなったのか？」

「そう。今一人なんだ。」

「何でそんなに楽しそうなんだ。悲しくないのか。親が死んだんだぞ。」

アユムは答えなかった。私が受話器の向こうで引きつった顔をしているのに気づいたのかもしれない。

「ノボルはいつつも『ぼく』から人を引き離れた。人はいくらでも集まって来るのに。ノボルがあんな力を持っているなんて……でも、ぼくのやっтерることって何かいけないことなの？」

泣きそうな、すがるような声だった。

「お前……」

「今からそっち行くから、待っててね。おじさんが、どこにいてもわかるからね。」

電話は切れた。

あの電話から、何時間経った。

どこに居ても誰かに見られている気がするのだ。

アユムはどこまで来ているのだろう。

そう思うと、震えが止まらなくなる。

自分は彼に殺されるのだろうか。

ノボルは、おそらく私を守っていてくれたのだろう。

『もう、病院には来ないほうが良いよ。』

あれは忠告だったのだ。

後悔しても、何もかも遅い。

誰かが家のドアを開けた。

「おじさん。」

子供はみんな、神様がくれたものなんだ。

言葉が甦ってゆく。

これが本当の話なら、平等に才能を分け与えてほしかった、と頭の良い友人に文句を言ったことがある。

その時に、才能や知恵のある十歳の子供のことを神童と呼ぶのだと教えてもらった。

「みいつけた。」

アユムの笑い声がした。

顔を上げると、いつものアユムがこちらを見おろしていた。白い服に身を包み、右手には真っ赤な林檎を持っていた。

「ほらね、ちゃんと見つけられたでしょ。」

しゃがんでにつこり笑う顔は、やっぱり子供なのだ。

「神様に貰った力は大事にしくちな。」

「これは貰った力じゃないよ。初めからみんな持ってたんだ。忘れてしまうのが普通なんだけど。」

「おじさんも、忘れなけりゃ良かったな。」

「そうだね。じゃ、行こうか。」

ふらっと立ち上がった。

「殺さないのか。」

「何で？ キャッチボールするって約束したでしょ。遊びに来たんだよ。」

「遊びに来た、だ、け？」

「うん。はい、これ。」

持っていた林檎を差し出された。

よく見ると、野球ボールが握られていたのだが、ボールは真っ赤だ。

「あれ、あれあれ。」

肩がだらりとなって、後から頭が、足が崩れる様に倒れた。倒れたアユムを抱きかかえると空気のように軽かった。

腹の辺りから、大量の血がこぼれて白い衣を汚した。

「何があっただ。誰がこんなことしたんだ。」

「お母さん。」

人が聞き取れるか聞き取れないかぎりぎりの呟きだった。

「どうしてあんなことしちゃったんだろう。ただ遊びに行きたい、って言っただけなのに。お母さん、包丁を振り回し始めて・・・ふふ、おもちゃの人形みたいだったんだ。」

手からボールがこぼれた。ボールは、ころころと転がっていく。瞳はガラス玉のように透き通って、真っ赤な薔薇の花の中で少年は、純白の衣を纏って永遠の夢を見ているようだった。

「だから言ったのに。」

いつの間にか、ノボルが立っていた、その顔は何の感情も示していなかった。

「アユムは大人になれなかったね。」

彼には永遠の夢さへ、指を鳴らせば現実に戻すことが出来るのだ。「コイツから聞いたんだろ。俺がアユムを眠らせたり嫌がらせしてたって。」

私はしっかりとアユムを抱きしめた。彼の夢を壊したく無かった。ノボルはボールを拾って、まるで果実の様にくちづけした。

「俺はね、人の運命を変えることをライフワークにしてるんだ。コイツの運命を変えてあげたかったんだけど、やっぱりできなかったね。」

ノボルは舌を出した。

「偉そうに、自分の母親も救えないくせに。」

皮肉たっぷりに言ってやった。

「あーあれね。いや、本当はそうだったんだけど無理だった。死ぬほどじゃなかったんだよね。やっぱり運命を変えるっていうのはなかなか難しいもんだ。もうちょっと、修行しないといけないのかなあ。」

この少年は母親の命を奪おうとしていたのか、まるで悪魔じゃないか。

「お前は、私たちの人生をもてあそんで楽しいのか。」

私は、拳を握った。

「わかってないなあ。せつかくアユムから守ってあげたのに。言葉に気をつけてよ。」

「どういふことだ。」

「アユムは、優しいけど。人を惑わす。おじさんだって、何度か経験あったでしょ。」

たしかに、と思った。

「無自覚だったのが悪いんだよ。アイツ、おじさんに会ってから自分の力に気づきやがって……。」

大事そうにボールをポケットに入れた。ズボンに赤い染みが広がる。後ろを向いているので、どんな顔をしているのかわからない。

「でも、一番悪いのはおじさんだ。」

怒りも、恐怖もなかった。

「アンタみたいな大人を俺たちが何て呼ぶのか知ってるか。」

両手を水平に広げて、天に向かって深呼吸する。

「俺たちはただ、愛されたいだけなんだ。何の能力も持っていないただの人の前たちが、どうして『あの人』に愛されているのかわからない。」

まるで親の愛情に飢えている子供のようだった。

「ねえ聞こえる？ 風に乗っておじさんの臭いがこの町に広がって、そしたらまた俺たちはお前の足元に集まって来るんだ。今だって皆の笑い声が近づいてきてるよ。」

ふふふ、何でだと思う？

どうして皆がアンタに執着していると思う。

俺は優しいから、愚かなお前に教えてあげようかな。

それは、お前はか……。」

そこまで言って、我に返ったように首を振る。子供の声に戻っていた。

「やっぱり、おしえなーい。」

やり慣れていないスキップをしながら、ドアのほうへ向かう。

「じゃあね。バイバイ。」

無邪気に両手を振って笑っている。

そのうち笑い声が何人もの子どもの声に重なる。

本能的に恐怖を感じる。

ドアノブに手を掛けた少年に、私は叫んだ。

「何を言おうとしたんだ。ノボル、教えてくれ。」

引きつったままの男の顔は、どんなに滑稽に映っただろう。

少年は振り返った。

「じゃあねえ、欲しい物があるんだ。それをくれたら教えてあげてもいいよ。」

「なんだ、それは。」

ぞっとする笑みが・・・。

「おじさん。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3570p/>

神童

2010年12月7日01時10分発行